

2015. 5. 25

No.189

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



2015. 野幌から初夏だより



5. 3 喜良野岳からの十勝連峰

風薫る5月、いつもの年より早くサクラもツツジもライラックも一気に咲きました。我が家のリンゴの花が清楚に咲いています。

前号発行から2ヵ月しかたっていないのに、地方選挙があり、戦争法案が閣議決定され国会審議が始まります。安倍政権は、憲法を無視して何としても戦争法案を通そうとしています。

自衛隊による米軍への後方支援の範囲拡大などの関連法案です。国民の60%を超える人が反対していると世論調査の結果が出ているのですから、民意を尊重して欲しいです。

私もさまざまな集会に参加して今がどんな時代なのかを学んでいます。先日は月刊「創」の編集者であり、ジャーナリ

いる。教育は国の統制下に置かれつつあると言います。日の丸、君が代の強制を大学にまで広げようとしていること。次のターゲットがメディアです。急に出てきたのではなく周到に準備されていたと言います。特に朝日新聞とNHKがリベラルの代表だったためであること。最近の朝日叩きは猛烈でした。

原発「吉田調書」記事の取り消し事件が象徴的でした。

それにしてもジャーナリズムの役割は「公権力の監視」であったはず。その役割を果たしていないと感じるのは私だけではないと思います。

先月、女性の1票で「戦争しない国に変える会」が113人で発足しました。私も息子を戦場には送りたくないです。私たちの代弁者として応援しています。

地方選挙で、女性の活躍が目立ちましたね。「怒れる女子会」で出会ったKさんも、石狩市の市議選に「女性の視点でまちづくり」を訴えて見事に

に当選しました。高齢者の単身世帯、母子家庭で子育てしている人たちへの支援政策などとても共感しました。

平和憲法、脱原発、言論の自由など大事な問題が山積みですが、私も黙ってはいられないとささやかですが住みよい社会になるよう



5. 19 自宅のリンゴの花



4. 16 宮島沼のマガン

トでもある篠田博之さんのお話を聴きました。

安倍首相は「戦争ができる国」にするには教育とメディアを抑えることが必要だと考えて

に努力したいですね。

新緑が美しい季節、山歩きを楽しみ、大自然を満喫したいと思います。



5. 3 下川町の森で
エゾヒメギフチョウ

7月で「銀河通信」が27周年、190号になります。皆さまからのメッセージお待ちしております。

3.27～3.30 熊野古道と神戸の旅



夫の春休みを利用して家族で熊野古道と神戸を旅しました。

3月27日は関西空港～高速バスで和歌山駅～特急で紀伊田辺と移動だけで終わりました。白浜

まで行く人が多いようですが、田辺のホテルが比較的安かったからです。

和歌山に行きたかったもうひとつの理由が原発のない県であること。また、知の巨人と言われた南方熊楠の生まれたところを知りたかったことです。大逆事件で命を失った大石誠之助は新宮の出身です。いずれも共通するのは反権力を貫いていることです。



28日、田辺駅近くでレンタカーを借り、狭い国道に驚きながらナビに従って熊野古道館近くの駐車場に車を止め、滝尻王子から歩きはじめました。

最初から急な登りが続きます。杉林を縫うようにして、険しい山道を登りながら、人々は心も浄化されたのでしょうか。ハイキング程度にしか考えていなくて、シーズンで登るには少し厳しかったです。快晴に恵まれ足元がしっかりしていたのでなんとか登れました。胎内くぐりも体験。ところがとても狭くて、その上ねじれていて、ようやく脱出。息子は背が高いのに難なく突破。夫は入らずに正規の登山道を登りました。この日のうちに神戸まで行かなくてはならないので展望台までとし下山しました。

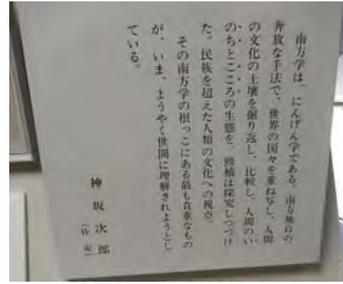
私たちが歩いているときは誰にも出会いませんでしたが、古道の起点には20人ぐらいの団体がガイドの案内で歩きはじめるところでした。

歩いたのは中辺路です。険しい山道が続く中辺路を歩くことはかつては修行でもあり、困難が多いほど、熊野の神の救いも大きいと人々は苦しい道のを超えて熊野をめざしました。熊野は昔から蘇りの国とされていたそうです。三山を巡れば、過去、現在、未来の安寧を得る。これが熊野三山のご利益と考えられたのですね。。

「熊野の神は浄不浄をとわず、貴賤に関わらず、男女を問わず受け入れてくれる神だったからこそ、上皇から庶民まで、熱狂的な信仰を集めたといわれます。熊野古道は罪障の消滅と再生を願う人々の足跡が残る祈りの道なのです。」解説文より

往復2時間半を歩いただけですが、清々しい気持ちになりました。これも熊野のごりやくでしょうか？

私たちは先を急ぎます。次に行ったのは南方熊楠記念館です。博物学者であり、民俗学、言語学、さまざまな分野で才能を発揮しましたが、大学ではな



人とありました。

屋上からは、美しい海と森が美しかったです。もう少し和歌山の自然を楽しみたかったのですが、時間が足りませんでした。里では

くあくまでも在野で活躍されたところが素晴らしいと思いました。エコロジーの先駆者でもあり、逮捕されてまで神社合祀に反対し、鎮守の森を守り抜いた



桜が満開でした。

3月29日、神戸は小雨。三ノ宮のホテルから坂道を登り、北野公開異人館めぐりをしました。オランダ館は花の国、そして香りの国です。200年前の

足踏自動演奏ピアノが目を引きました。次はデンマーク館。8世紀から11世紀にかけてバイキングの時代の展示がとても凝っていました。オーストリアはヨーロッパで一番美しい国と親しまれていますね。オーストリア館ではモーツァルトが愛用したピアノ（複製）が当時の雰囲気を与えていました。（上の写真）

雨が激しくならないうちに観光船に乗りたくて神戸港をめざして歩きはじめました。私は登山で歩くのは慣れていますが、いつも車で移動する夫が歩こうと言ったのが意外でした。結構タフでした。ようやく、観光船に乗り込むことができ明石海峡大橋の展望を楽しみました。

おなかを空かせて食べた神戸牛は我が家にとってはかなり贅沢でした。

和歌山も神戸も歩きに歩いた2日間でした。おかげで街と親しくなれた気がします。地図も役立ちました。

帰りは伊丹空港から空の旅を楽しみました。快晴の眼下に富士山、赤石山脈、木曾山脈、御嶽山が並んで見えました。さらに東北の上空では、優美な鳥海山がのびやかに広がり、山への憧憬が強くなりました。



写真は3.30上空からの眺め

上から富士山、赤石山脈、木曾山脈、御嶽山

往復540km 野の花と星見の旅

GWの5月2日から1泊2日で夫と野の花と星見の旅をしました。星好きな夫と野の花と登山が好きな私はそれぞれにしたいことを続けてきましたが、今回初めてお互いが歩み寄り、旭川の突哨山～名寄天文台～下川町の森を訪ねました。

広大なカタクリの群生地として知られる突哨山にわずかの期待をつないで、立ち寄りましたがカタクリやエゾエンゴサクの開花はほとんど終わっていました。変わって、オオバナノエンレイソウやニリン



ソウの白が一面に咲き見事でした。エゾノリュウキンカも沼地に咲き始めていました。

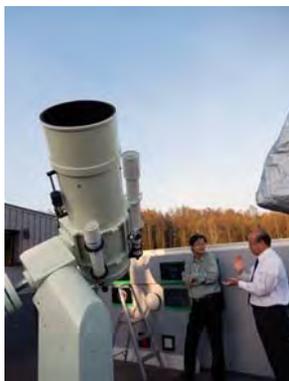
あちこちを寄り道して名寄市立天文台「きたすばる」に着いたのは4時過ぎでした。



写真上からカタクリ、オオバナノエンレイソウ、ニリンソウ

日中でしたが、50センチの望遠鏡で、金星、月、木星を観測。まだ日が高いのに木星の縞模様が見えて感激でした。夫は自宅に小さな観測所を作りたいという夢が広がったようです。

20時から始まった観測会



には50人ぐらいの人たちが集まり、日本で2番目に大きいピリカ望遠鏡で木星などを観測しました。私の星座であるしし座の二重星アルギエバはオレンジ色の星が二つ輝いてすてきでした。私も歳をとっても輝いてほしいですね。

翌日は下川の森に。エゾヒメギフチョウを見つけたのは夫です。(1面の写真)夫の初めての赴任地で、蝶好きな



K先生からエゾヒメギフチョウの卵をもらってふ化させた経験があったとかで、生態に詳しいのでびっくり。夫は中学で理科を教えています。毎日オクエゾサイシンを採集するのが大変だったと懐かしんでいました。

ハンセン病市民学会に参加して



11回目のハンセン病市民学会が5月9日に大手町の日経ホールで、10日は東村山市の多摩全生園で開かれました。

私は青森の松丘保養園や、台湾の楽生院を訪ねて当事者と支援者のお話を聞いたことはありましたが市民学会は初めての参加です。「ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会」の会員として、浅川さん、井上さん夫妻と一緒にだったので、心強かったです。アウシュヴィッツに私たちと一緒に行くことになっていた、療養所入所者協議会の会長であった神美知宏さんが昨年5月9日に突然亡くなられ、この市民学会にいらっしやらないのが寂しく思いました。参加者で黙とうを捧げました。

今年のテーマは「バトンをつなごう～当事者運動と市民のかかわり」で、当事者や弁護士、療養



5.9 レセプション会場で台湾の参加者たち

所の医師や教育現場からの報告や、社会復帰を手助けする相談員の取り組みが語られました。

社会復帰を果たした退所者の人たちに立ちほだかるのは、差別と偏見です。私たちは、当事者の声に耳を傾け、実態を知ること。市民の立場でどう向き合うべきか考える場になりました。

台湾に2年前に行って驚いたのは、学生たちが祖父母に接するように慈しむ姿でした。ハンセン病回復者と一緒にデモする映像に感銘を受けました。今回も学生らが20人も台湾から参加していたのが印象的でした。韓国からも10数人の参加がありました。

翌日は、東村山市にある多摩全生園・国立ハンセン病資料館で分科会が開かれました。私は、「国際連帯」の分科会に参加しました。当事者が、人間としての尊厳を求めて、堰を切ったように話されました。台湾の方は「より多くの若い世代のひとたちが、私たちの運動を受けついで行ってくれと信じています」と力強く語り、連帯の輪が広がりつつあるのを国際色豊かな会場からも感じました。

零 Books



大間原発と日本の未来

野村保子著 寿郎社 1,900円+税

函館市に住むフリーライターの野村保子さんが、青森県大間町の大間原発周辺をルポしたのが本書です。

チェルノブイリ原発事故が起きた1986年、以前から食の安全に関心があったこと、遠く離れた土地の事故でも、日本に影響することに衝撃を受け、原発問題を考えるようになった野村さん。

津軽海峡を挟み、対岸23キロの大間町に建設されている同原発の安全性にも関心を持ち、94年ごろから取材をスタート。「事故が起きれば、将来にわたって影響が残る。どうしても受け入れられない」。同原発の建設差し止めを求める市民訴訟にも参加し、脱原発を訴えています。

大間町には通算50回以上訪問し、町役場や漁協、周辺住民ら関係者取材し、建設計画が浮上した76年以降、徐々に建設容認に転じた地元住民の複雑な思いなどを丁寧に描いています。

特に「この海を守っていけば、どんなことがあっても食べていける」と語り、大間町で原発反対を貫いて亡くなった熊谷あさ子さんの思いも伝えます。

世界で初めてのフルMOX原発は大変危険な原発です。原爆の材料であるプルトニウムを6.5トン装荷します。原発から出てくる使用済み核燃料は、行き場がなく原発立地地点に留め置かれます。これ以上の原発を日本は受け入れられません。

野村さんは「原発も憲法も人権も、自分の問題としてとらえて闘わなければ流れは変えられない」と警鐘を鳴らします。大間原発で事故が起きれば、食糧基地としての豊かな北海道は失われます。

函館市は事業者のJパワー（電源開発）と国を相手取り、建設差し止めを求める訴訟を東京地裁に起こしました。建設中止になるよう、私たちも連帯をしなければと思います。是非読んでください。



女たちのサバイバル作戦

上野千鶴子著 文春新書
800円+税

働く女性は、以前より生きやすくなったのでしょうか？上野千鶴子さんの答えは「イエス&ノー」です。男女雇用

機会均等法から約30年。その功罪を問います。

私も懸命に働いてきた一人です。幸いなことに男女格差のない職業だったおかげで、働きにくさを感じずに済みました。でも労働量は相当だったと思います。子どもが小さかった時、仕事を終えてからの子連れでの会議参加は嫌でした。あまりにも忙しすぎて民主的な職場にも関わらず、市民運動に参加する人は少ない

と感じました。仕事と子育てで目いっぱいだったのです。

ネオリベ（新自由主義）改革が労働市場にもたらしたのは「労働のビッグバン」こと非正規雇用の規制緩和でした。その結果起きた「雇用崩壊」から「格差」が拡大したと言われますが、「格差」はそれ以前から女性の問題でした。現在、非正規雇用者の7割は女性、女性労働者の6割が非正規。新卒採用の女性の5割以上を非正規が占めるのです。驚きです。

使える女は「男なみ」に。そうでない女はつごうのよい使い捨てに。総合職正社員は連日の残業で結婚も出産もできないくらいテンパっています。本書ではその傾向がすでに86年の雇用機会均等法からはじまっていたとします。女性というだけで、いっしょくたに差別されていたその昔。しかし、同法が少数のエリート総合職と、マスの一般職に女性を分断したのです。その後の四半世紀のあいだに、雇均法が適用されない非正規社員が増加します。働く女性自身のなかにも「勝敗優劣」「自己責任」が内面化されていきます。

上野さんは「こんな働き方でいいの？」と問います。

とはいえ、どんな世の中でも、女たちは生き延びていかなければならないと書きます。「日本が泥舟なら、沈没するのは船長だけでたくさん。どんなやりかたでもいいから、世界中のどこかで、元気でいてほしい。（略）立ち去ろうとしないあなたがいたら、もういちど、微力な者たちの戦いを思い出してほしい。官邸前でのデモだって、評判の悪いフェミニズムだって、少しは世の中を変えることができるかもしれない」という呼びかけが、心に響きました。



4.18 「何を怖れる」上映会と講演会で監督の松井久子さんとも映画にも出演された上野千鶴子さんが対談しました。

186号（2014.12.15発行）で映画「何を怖れるフェミニズムを生きた女たち」と同名の著書を紹介しています。HPをご覧ください。

再度「何を怖れる」を観ましたが、1回目だけでは分からなかった、今では当たり前なことでもフェミニストたちが当時の闘いを通して獲得することが多いのにな改めて感銘を受けました。歴史を作った14人の女たちの人生に励まされました。キノで上映中です。是非ご覧ください。



わたくしらしく輝く幸せ
女・詩・生命・・・うたいつづけて

吉岡しげ美著 重紀書房 1,600円＋税

日本の女性詩人の作品に曲をつけ、ピアノのひき語りで歌ってきた吉岡しげ美さんに出会ったのは10年近く前の札幌の時計台ホールでした。

本書は「自分らしく生きたい」と願った与謝野晶子、金子みすゞ、茨木のり子、新川和江らの詩に曲をつけて、40年近く歌ってきたしげ美さんの自伝です。

15歳の時に経験した父親の死、出産、夫の病気などの転機を迎えては自律神経失調症に悩まされたこと、乳がん手術の体験など、孤独を抱えながら体の不調と向き合ってきたことを率直に語っています。

本書には、女性の自立や、自由、反戦をうたう彼女たちの思いに共感した自身の歩みがつづられています。しげ美さんが音楽活動を始めた頃には、露骨な女性差別があったと書いています。男の作詞したステレオタイプの女にうんざりし、そこで出会ったのが女性詩人の作品だったのです。

私が聴いたのは金子みすゞと知里幸恵の「アイヌ神謡集」でした。ずっと心に入ってきて、情景が目に見えるようでした。以来、吉岡しげ美ファンになりました。「本音で、自然に自由に生きることは、女にとっても男にとっても、そして子どもにとっても、疲れてさびしく孤独なものかもしれません。でもそれぞれの年齢を愛おしく精いっぱい生きなければならぬと強く思います」と書いています。しげ美さんの歌が心に響く訳が理解できたように思います。私と似たところがある人だな～と親近感がわきました。銀河通信読者です。

札幌公演、どなたか一緒に企画しませんか？

吉岡しげ美コンサート

「わたしが一番きれいだったとき」
一戦後70年から未来へ詩いつなく
7月6日(月) 浜離宮朝日ホール
18:30開場 19:00開演
詳しくはHPをご覧ください。
申し込みFAX03-3486-7728



冬の犬

アリスティア・マクラウド著
中野恵津子訳 新潮社 1,900円＋税

著者のアリスティア・マクラウドは31年間にわずか16篇という寡作ですが短編の名手として知られます。

スコットランド高地の移民が多く住む、カナダ東端の厳冬の島ケープ・ブレトンを舞台にしたささやかな人生を紡ぐ人々の物語を収めた、珠玉の短篇集です。

冬の寒さが厳しい北海道と相通じるものがあり人と動物が共に生きる姿が鮮やかに描かれています。

役立たずで力持ちの金茶色の犬と少年の、猛吹雪の午後の苦い秘密を描く表題作。白頭鷺の巢近くに住む孤独なゲール語民謡最後の歌手の物語。灰色の大きな犬の伝説を背負った一族の話。ただ一度だけ交わった亡き恋人を胸に、孤島の灯台を黙々と守る女の生涯。人生の美しさと哀しみ、短篇小説の気品と喜びに満ちた8篇。(カバー紹介より)

訳者のあとがきにはこうあります。「マクラウドの作品のなかで、イメージ豊かに描き出されているケープ・ブレトン島の景色には、あふれんばかりの作者の愛情が感じられる。10歳で両親の故郷であるこの島に移ってきて、少年時代を過ごした。(略) 人間の生活や動物とのかかわり、自然の美しさや厳しさを描いた作品には、一篇一篇が深く濃く、いっきには先に進ませない引力とつかぬ呪縛力というか、強い力があって、引っ張られて戻ってみると、新しい発見があったりするのだ。」とあり、私も何度も行きつ戻りつしながら読み終えました。

文章は骨太でありながらもみずみずしく、まるで映画のワンシーンを観ているようでした。

スコットランドの歴史やケープ・ブレトン島についても時間をみつけて調べたり、機会があれば小説の世界をこの目で確かめたいと思いました。



わたしの憲法手帳

～いきいき沖縄ライフ～ 第5版

沖縄県憲法普及協議会 800円＋税

沖縄県憲法普及協議会が発行する「わたしの憲法手帳」は単なる憲法の解説本ではありません。各条文は、沖縄の事例に即して解説されていて、この一冊で憲法と沖縄の実情がわかる内容となっています。

第9条「戦争の放棄」に関する解説では、沖縄の9条宣言に該当するものとして、沖縄県立平和祈念資料館に掲げられているアピールを紹介しています。「沖縄戦の実相にふれるたびに、戦争というものは、これほど残忍で、これほど汚辱にまみれたものはないと思うのです。このなまなましい体験の前では、いかなる人でも戦争を肯定し美化することはできないはず。戦争をおこすのはたしかに人間です。しかしそれ以上に戦争を許さない努力のできるのも私たち人間ではないでしょうか」とあります。

人間の財産としての人權の項では、人權獲得の歴史を軽く考え、人權を軽視しようとしている人たちがいると警鐘を鳴らしています。

沖縄に米軍基地が集中し、県民に基地被害、米軍犯罪の被害を与えています。そして朝鮮戦争、ベトナム戦争をはじめ世界各国での米軍の戦争の出撃拠点とされているのです。沖縄の犠牲の上に自分たちがあるのだと思います。是非、いつも手元において憲法を精神を守りたいと思います。

泊廃炉訴訟の弁護士、林千賀子さんも編集に加わっています。是非お読みください。



大雪山讃歌

高澤光雄著 北海道出版文化センター
1,600円+税

大雪山山系を訪れたのは87回。延べ日数は200日を超える。65年間に

わたり綴った大雪山「讃歌」25編を収録したのが本書です。

高澤光雄さんは現在83歳の現役登山家であり、登山史研究家です。私も高澤さんと同じ山岳会に所属し高澤さんから、登山文化の奥深さを学びました。昨年ポーランドからの帰り、偶然仁川空港で「アルプス紀行」を終えた高澤さんにお会いしたのも驚きでした。

高校2年(1949年)の大雪山初登山の思い出から始まり、数多くのエピソードが書かれています。どれもついでこの間の出来事のように天候や植生、その時に食べたものことなどが克明に記されています。私は読んでいて、高校時代の初登山を思い出しました。父から「人に迷惑をかけてはならぬ」と言われて1週間歩くトレーニングをしました。JPに乘らずに歩いて通ったのです。坂道で、電車とすれ違ふと、同級生たちが「みなちゃんバンガレ！」と手を振って応援してくれました。初めての山、夕張岳山頂に立った時の感動は今も心の中にあります。

道に迷ったこと、熊に出会ったこと、腰まで雪に埋まったこと、クワウンナイ川の増水に巻き込まれそうになり、一日遅れで無事に下山したことなどが淡々とした筆致で描かれています。

大雪山の中にある桂月岳の名前のもとになった大正時代の詩人・歌人・評論家であるところの大町桂月の登山についても書かれています。どれだけたくさんの資料を読み込んだのかが本書から伝わってきます。飽くなき知的好奇心に、私もそうありたいと励まされました。

ご本人が描いた大雪山のスケッチがステキです。



いいがかり 原発「吉田調書」記事

取り消し事件と朝日新聞の迷走

編集代表・鎌田慧 花田達朗 森まゆみ
七つ森書館 2,400円+税

花田達朗さんは、これは「『吉田調

書』誤報問題」ではなく「『吉田調書』記事取り消し事件」だと糾弾。鎌田慧さんは、「戦後民主主義を全否定する」安倍政権による「言論弾圧」だと断言しています。ジャーナリスト、原発技術者ら61人が事件の真相に迫ります。

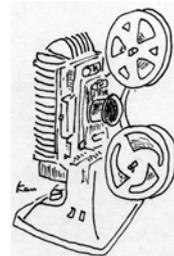
朝日新聞は「吉田調書」を1面トップで報道しました。吉田昌郎氏は福島第一原発事故当時所長であった人物。政府事故調査・検証委員会が聞き取りをした調書は、極秘扱いされてきましたがそれをスクープしたのです。

しかし、従軍慰安婦報道、池上コラム掲載拒否問題と絡めて右派メディアなどからの峻烈なバッシングが始まったために、耐えきれなくなった朝日新聞社は「吉田調書」報道を取り消し、取材記者らを処分しました。

なぜ、「吉田調書」報道は取り消されたのか。報道の自由はどうなるのかなど、日本の言論状況の危険性を問います。

パレードへようこそ

イギリス マシュー・ウォーチャス
監督



1984年、サッチャー政権下のイギリスで、炭鉱閉鎖案に抗議してストライキが4ヵ月目に突入した頃、若いゲイの活動家が、炭鉱労働者の闘いに共感し、仲間と募金活動を始めます。

ゲイやレスビアンに偏見を持つ労働組合からは募金を断られるのですが、唯一、ウェールズの炭鉱が、勘違いから受け取りを快諾します。

同性愛者のグループと炭鉱労働者が誤解と衝突を乗り越えて手を取り合っていく姿。友情と連帯の絆を深めるのです。80年代の名曲が懐かしく楽しい。ユーモアもたっぷり。笑いながら差別や偏見は知らないことから始まるんだなと実感しました。町のパーティで、ダンスを披露して喝采を浴びる俳優が素敵でした。お互いが歩みより、友情が芽生える温かさにジーンとしました。

全く異なる世界に生きる者どうしが奇跡的に心を重ね合わせた実話です。勇気がわいてきて、私も連帯の輪に飛び入りしたくなりました。

ラストのパレードが感動的。団結と連帯のかけがえのない尊さを問います。歴史の事実を伝えたいと映画化した監督の情熱が伝わってきます。お勧めです！

パリよ永遠に

フランス・ドイツ
フォルカー・シュレンドルフ監督



第二次世界大戦の末期

ドイツ占領下のパリ。ドイツの敗北が目前に迫る中で、コルティッツ将軍はパリ壊滅を命じられます。エッフェル塔や、ノートルダム寺院、オペラ座などに爆発物が仕掛けられ、命令を待つばかりになっていました。パリで生まれ育ったスウェーデン領事ノルドリンクの、誠意と方便を尽くした駆け引きが臨場感あふれます。わずか一晩の二人の息づまるような会話を私も固唾を飲んで見守りました。

パリはいかにして破壊をまぬがれることができたのか？ これはサスペンスです。美しいパリを守った命がけの外交の力に感動しました。



「初恋のきた道」や「紅いコーリャン」で知られる、巨匠チャン・イーモウ監督の最新作。

文化大革命が終結し20年ぶりに解放された夫が自宅へ戻ると、待ちすぎた妻は心労のあまり、夫の記憶だけを失っていました。夫は他人として向かいの家に住み、娘の助けを借りながら、妻に思い出してもらおうと奮闘するのですが……。

監督自身が青春時代、文化大革命で、強制労働を体験していたことが、映画化につながりました。

記憶は消えても愛は消えない妻は、駅で夫の帰りを待ち続けます。

夫は別れた当時の服装で駅に降りてきたり、夫婦の思い出のピアノを弾いたりと努力を重ねますが、記憶は戻りません。一番泣けたのは、妻に宛てた函いっばいの手紙を読んで聞かせる場面。こんなに深く愛し合っているのに、夫であることが分からないのです。コン・リーの毅然として待ち続ける孤独感が胸に迫りました。夫を演じたチェン・ダオミンの誠実さも自然で良かったです。文革とは家族を引き離し、自由に生きる権利を奪ったのだと、いいようのない怒りがこみ上げました。

秘密保護法が成立し、日本もこんな時代がやってくるかもしれないと、他国の悲劇と片づけられないと思いました。

歴史の暗部への痛烈な批判が映画にはこめられています。

日本と原発

私たちは原発で幸せですか？

河合弘之監督

弁護士の河合弘之さんと朋友、海渡雄一さん、訴訟を共に闘う木村結さんの3人が、多数の関係者にインタビュー。現地での情報収集などをもとに、原発事故に巻き込まれた人々の苦しみ、原発事故を引き起こした背景や、エネルギー政策のウソと真実を追及したドキュメンタリーです。

「これ一本で推進派の主張を完全に論破し、原発問題のすべてがわかるように」と制作し、4月28日札幌地裁で開かれた泊原発廃炉訴訟の第13回口頭弁論で映画『日本と原発』が証拠として提出され、30分間上映されました。

わかりやすい原発問題総集編です。適切な映像の引用や図表、出所の確かな資料、感情論ではない現実的な脱原発の具体策を語る人物へのインタビューなどを用い、原発問題のすべて、といっても過言ではない多くのサブテーマをコンパクトに語っています。

原発事故は「国破れて山河無し」になることは福島事故で明らかです。二度と同じ過ちを繰り返させてはならないという監督らの強い思いが伝わってきます。



藤本幸久監督

アメリカ海兵隊ブートキャンプの若者たちと帰還兵の姿に焦点を



当て戦争を続ける国、アメリカの真実をあぶり出したドキュメンタリーです。2008年の作品ですが戦争がいかに人間を破壊するのかがリアルに伝わってきました。ただ2時間は長かったです。

集団的自衛権行使容認で、自衛隊の海外派遣は現実になろうとしています。行使容認が決まった一週間後くらいに、我が家にも新聞折り込みで「自衛官募集」のチラシが入り、あまりのタイミングの良さに驚いたことがあります。

今、アメリカではホームレスが急増しています。そのうち約4割が退役軍人だといわれています。彼等は正義のために戦う覚悟で戦場に赴いても、殺すのは敵というより、罪もない民間人であることを知って、葛藤と罪悪感からPTSD（心的外傷後ストレス障害）に陥るのが圧倒的です。人格を失って社会復帰はおろか日常生活も営めなくなる現実。「貧乏人は、軍隊に行けば大学の学費も技術も健康保険も入手できる」というウソで釣って、高卒者を新兵として送り出しているのです。

元海兵隊員の日本人妻は「日本には帰りたいと思うけど、だんだんアメリカっぽくなっていくのがいや」と言います。海外から日本を見るとむしろ良くわかるのかも知れないですね。その夫は戦争にいくことを拒否。NPOで高校生に「兵士にならなくても奨学金は受けられる」と、伝える仕事をしています。

この映画は近い将来の日本社会の姿を描いているのではと思いました。若い人にこそ観てもらいたいです。

ラストに兵士の母や老人による徴兵阻止運動が行われている場面が出てきます。「私たちは怒れるおばあちゃん。みんなの命を助けるの」と歌いながら新兵募集の貼紙に「Closed」の貼紙をして回る老女たち。手錠を掛けられてもニコニコして「喜んで逮捕されます。1人でも入隊から救えれば価値があります」と胸を張る場面が一番良かったです。私もそんなおばあちゃんになりたいです。この場面をトップに持って来たらもっと良かったと思いました。

ミリケン恵子さん（8面もお読みください）からお誘いを受けて、小樽まで観に行った映画です。少し長くなりましたが国会に提出された「戦争法案」が通れば、明らかに海外での武力行使につながります。平和を守りたいです。



シベリウスが今年生誕150年になります。4月19日、弦楽四重奏曲演奏会があり、藻岩山に近い奥井理ギャラリーでシベリウスの世界を楽しみました。（写真）

小さな私の出来ること 社会はきっと変わる

みみずく舎 ミリケン恵子（赤井川村）

銀河通信の読者の皆さんこんにちは。北海道赤井川村のミリケン恵子と言います。

自給的な営みを試みながら暮らす一主婦です。それと並行して『みみずく舎』という屋号で市民活動もしています。『おむすび』という名前のミニコミ紙を毎月発行している他、自主上映会、ファーマーズマーケットの催しもしています。その他に地域の農産品を小樽に移動販売する行商のような活動もしています。



つい最近では泊原発の廃炉宣言を知事に要請する『子どもの日宣言署名』という署名活動も始めました。まわりの協力を得ながらも一人だけでしている活動です。思いつく事を形にする

小さな活動の意義を感じています。

活動の目指すものは、『地域をつなぐ事』『過剰なエネルギー依存から、私達が抜け出す仕組み、を作る事』。例えば、ここでご紹介する『ひとりCSA』は赤井川と小樽という『地域』を一つの『小さな地球』に見立て直し、その中で経済循環させる、『顔の見える小規模経済』の仕組み作りを目指したものです。『小さな地球』の中にある『農業生産者』や『家族経営規模の販売人』『意識ある消費者』、それぞれのニーズを結び事で、『人』と『人』という繋がりを作り、そこから継続する『お得意様』のような関係を作る。限られたお金を納得いく方向へ流す『小規模経済』の再生を狙ってます。

又、農業生産の現場は、深刻な高齢化が進んでいます。私の地域でも生産者は平均70歳を超えています。尚も生産を続けているのは、年金だけでは彼らの生活形成が不可能だからです。

彼らも失えば、北海道はおろか日本の農業は、TPPどころではありません。これまで小規模経営だった農業が、企業の大規模経営に転換すれば、地域は崩壊です。農薬や除草剤を大量に投入され、安い労働力で人が使い捨てられていく。それらが「安さ」を生む法則です。「安いもの」が買えれば消費者は喜ぶかもしれない。「安ければ」「自分さえ良ければ」という消費者の意識が、安全とはかけ離れた今の社会を作りだしました。

流通はエネルギー浪費の最たるものです。だからこそ小さな規模の地域の流通は『過剰なエネルギー依存』から私達を解放する選択肢です。正しい流通を地域に残す為には、「意識」を持つ人達を繋ぎ地域の生産者を「買い支える」ことです。

手前味噌ですが、一人の主婦が社会の不安や不満にまずは行動で解決を模索したある意味では、自由になるお金も無くコネも無い私のような主婦が出来ることは、「思い」があれば誰にでも出来るという事です。

小さな希望を一つずつ積み上げていく。小さな存在である事に負けず、出来ることを探していけば、社会はきっと変わる。私はそう信じています。

100年の罅 大逆事件は生きている

上映会のお知らせ



大逆事件は明治末年に起こった国家によるフレームアップ=謀略事件です。



天皇暗殺を企てたとして大勢の罪なき人が投獄され、幸徳秋水や管野須賀子ら12人が絞首刑に処せられました。彼らは日露戦争に反対し、あくまで非戦・平和を主張した人々でした。なぜ殺されなければならなかったのでしょうか？ 本当はどのような人々だったのでしょ

うでしょうか？ 国家と司法、国家と人権、国家と私たち。100年たった現在もなお、私たちの胸の中に重い問いとして罅のように響き続けています。

実行委員会で試写会を開きました。特定秘密保護法が施行されて、大逆事件のような思想弾圧が起こらないと誰が断言できるのでしょうか？当時の状況と今がとても似ていると思います。是非たくさんの方に観ていただきたくチラシを同封しました。6月27日（土）札幌市教育文化会館
上映10:30 13:30 16:00 18:30 いずれもミニ解説+上映で110分 チケット扱っています。

minginga@agate.plala.or.jp または090-6870-9225 に希望時間もお知らせください。



人権・平和・脱原発・自由学校「遊」さまざまな活動の仲間です（写真はご本人の了解を得て掲載）

購読料とカンパをありがとうございます（敬称略）
2015.3.23~5.7

吉岡しげ美（練馬区）森内実江（江別市）ミリケン恵子（赤井川村）内田篤のり（札幌市）三浦恵美子（旭川市）カンパ含む 森隆子（赤井川村）亀田法子（江別市）カンパ含む 菅原みえ子（岩見沢市）12号分

web読者カンパ 神原照子 中川充 菊池和美 仲俣善雄 合計31,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございました。高澤光雄さんからは著書をいただきました。拙文ですが6ページで紹介しています。